

V203c 小口径望遠鏡用分光器 LISA の性能評価

田邊健茲, 小木美奈子 (岡山理科大), 今村和義 (岡山理科大/岡山天文博物館)

新星や超新星など、突発天体あるいは輝線天体の観測に対して、機動性のある personal な分光観測システムは不可欠である。従来、我々岡山理科大学チームは SBIG 社製の DSS-7 ($R \sim 400$) ならびに SGS ($R \sim 2300$) という小型分光器を用いてこれら輝線天体 (特に新星) の分光観測を行い、成果を上げてきた。

最近、我々はフランス製の分光器 LISA (Shelyak 社) を入手した。この分光器は分解能 (R) が約 600 ~ 1000 で optical ならびに近赤外にも対応するように設計されている。この分光器は、optical の波長範囲が 4000 ~ 7000 で上記の DSS-7 に対応する機種であるが、スリット幅がより細く ($15 \mu\text{m}$)、しかも格子定数が大きい (300本/mm) ので DSS-7 より分解能が高い。さらにガイド用スリットビューアー (CCD) が付いているので、より長時間の露光に適していると考えられる。ちなみに DSS-7 の場合口径 28 センチメートルで約 11 等が限度である。

我々はこの分光器を岡山理科大学天文台の 30 センチメートル・シュミットカセグレイン望遠鏡に取り付け、各種輝線天体に向けてスペクトルを取得してみた。本講演ではその結果を発表する。